

令和 6 年度

学 校 評 価

<記入上の留意点>

- 評価Ⅰは教職員、評価Ⅱは校園長、評価Ⅲ・評価Ⅳは学校関係者評価委員の評価を記入する。
- 評価Ⅰは小数第一位まで記入する。評価Ⅱは4段階を基本とするが、0.5刻みまでを許容とする。評価ⅣはABCDで記入する。
- 学校の実態に応じて評価内容を追加して設定することができる。

◎ 評価Ⅰ、評価Ⅱの基準

4	十分達成できた
3	達成できた
2	取り組んでいるが、成果は十分でない
1	取組が不十分である

◎ 評価Ⅲの基準

4	よく取り組んでおり、成果が大きい
3	熱心に取り組んでおり、今後が期待できる
2	取り組んでいるが、成果は十分でない
1	取組が不十分である

◎ 評価Ⅳの基準

A	優れている
B	適切である
C	おおむね適切である
D	要改善

尼 崎 市 立

尼崎高等

学 校

令和6年度 学校評価

【教育の基本方針】(尼崎市教育振興基本計画)

- 1 未来志向の教育
- 2 個の尊厳や人権の尊重
- 3 家庭・地域社会との連携(子どもの視点に立った教育)

[各校の重点取組について]

常に生徒の安心・安全を第一に考えた学校づくり

開かれた学校づくり

伝統を大切にするとともに、新しい市尼を想像する学校づくり

学 校 評 価 の 観 点

1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む

- (1) 授業改善の取組を促進するとともに、客観的なデータを踏まえた確かな学力の保証及び縦のつながりを重視した校種間の連携に努める
- (2) 障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる特別支援教育の取組を充実させる
- (3) 食育を通して生活改善の取組を促進し、健全な心と身体を培い、豊かな人間性の育成を図る
- (4) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る
- (5) 積極的にICTを活用し、情報活用能力の育成を図る

評価Ⅰ(教職員)

評価Ⅱ(校長)

3.2

3.0

取組

成果

課題と改善策

・ICTを利用した学習支援の確立、採点や成績処理など教務的作業のICT化。(教務部)
・3学年進学希望者に対する補習や小論文・面接指導及び各オリエンテーションなどの実施。(進路指導部)
・高大連携事業として、大阪体育大学より講師を招き特別講義を行う。(体育科)
・学習活動では、毎日の朝学習において、基礎学力の定着と向上を図り、部活動では自ら積極的に取り組み文武両道を目指す。(1学年)
・予習→授業→復習という「黄金のサイクル」で、自学自習の習慣を身につける。(2学年)
・修学旅行に向けて現地の文化や歴史的な内容などについて学習する。(2学年)
・自習室を開設して、自ら学ぶ時間を持たせる。補習授業科目を設定し、受講させ確かな学力を身につけさせる。また、進路講演会、校外模試を適宜実施し、進路の決定やその実現の対策ができるようにする。(3学年)

・本校ではBYODを導入し、全学年の生徒が自分の端末を持って学校生活を送るようになった。これにより、Google for Educationの活用が一層進み、学習の効率化や教育の質の向上が顕著に見られる。例えばGoogle Classroomを活用することで、授業の資料や課題の配布・提出・管理がデジタル化され、紙のプリント配布の手間が大幅に削減された。また、Google ドキュメントやスプレッドシートを用いることで、生徒はリアルタイムで共同編集を行い、意見交換を活発に行えるようになった。これにより、生徒一人ひとりの理解度に応じた学習が可能になり、個別指導の機会も増えている。また、Google Driveを活用した資料の一元管理により、教員同士の教材共有がスムーズになり、校務の効率化が進んだ。成績処理では「デジタル採点2」から「百問総乱」へとデジタル採点システムが移行され、使用方法が異なることでの使用率の低下が懸念されたが、教職員間での研修もあり、多くの教員が使用している。来年度からBYODの見直しとして、端末を尼崎市教育委員会が採択したchromebookからi-padに変更する。特色づくり委員会にて吟味し、使いやすさや生徒のニーズに併せることを理由に本校独自の採択に至った。現在、i-pad専用のMDMやフィルターの開設準備や学校生活でのICT利用規約のルールの見直し等を行っている。(教務部)
・進学希望者については高い目標に向けて最後まで努力させることができた。(進路指導部)
・大体大より、本年も5名の先生に講師として授業を行って頂いた。普段の授業よりも専門的な講義を受けることが出来、良い刺激となった。(体育科)
・毎日の朝学習において、基礎学力の定着と向上をはかることができたが、文武両道まで達したとは思わない。(1学年)
・各教科からのプリントやスタディサブリを用いた週末課題への取り組み状況は良い。日々の朝学習にも真摯に取り組んだ。特に体育科・文系・理系とクラスに応じた内容も取り入れ進路希望に応じた基礎力を養った。また、考査前に学習計画表を用いて、主体的に学習に取り組む姿勢が定着した。基礎学力向上のための補習や大学入試に向けた応用的な内容の補習を開設し、生徒の学力に応じた指導を行った。進路学習を定期的に行い、進路目標を明確化させるよう導き、個々の意識は高まっている。(2学年)
・マレーシア及び日本の歴史や文化について、奈良への校外学習やLHR、教科の授業や課題において学ぶ機会を持った。事前学習で得た知識をベースに、現地で実際に体験・見聞を広めることができた。マラヤ大学との学校交流や現地学生ガイドと回った市外研修において生徒は英語を用いて活発に交流を行い、英語コミュニケーション能力を向上させることができた。また事前に準備した日本の伝統的な遊びをはじめ、自国の文化を発信する機会ももった。(2学年)
・自ら学ぶ時間を持つよう自習室をもうけ、早期・放課後の補習を設定し、進路実現の基礎を作るようにしました。校外模試、プレ共通テストなど入試に対する準備にも余念なく取り組んできました。この積み重ねが、今後の進路決定に現れることを期待しています。(3学年)

・探究活動の質を高めるための指導法の研究と実践やデジタル教材をより積極的に利用し、学習成果を適切に測る。(教務部)
・学力向上はもとより、社会に出るための学部・学科の研究、大学の研究がより一層必要とされる。(進路指導部)
・大阪体育大学にこだわらず、他の大学からも講師の招聘を行ったり出来るようになれば良いと思いました。(体育科)
・毎日の朝学習において、自らの学習時間であり、始まるの時間から落ち着いて学習できるようにさせる。また部活動についても中心学年として責任を持たせ行動させる。(1学年)
・クラブ活動と学習の両立のためには、日常的な学習計画が必要であるが、実態は考査前に限られており、3年生に向けて毎日の学習計画を立てさせることが課題である。改善策としては学習計画・学習記録のアプリやサイトの利用を促す。スタディサブリの利用により、既習の領域でつまづいている内容の復習を促す。定期的な補習を開設し、入試に向けて学力を向上させる。(2学年)
・マレーシア現地での交流を通して、英語力の一層の向上が課題であることを感じた。異文化や自国の文化について1年次から様々なジャンルで学ぶ機会を作る。また、今回も研修内容を一部選択制にして様々なコース別研修を実施したが、体育科と普通科では進路希望等が大きく異なるのでやや限界を感じる部分がある。修学旅行を研修旅行として認識し、体育科と普通科で目的に応じた場所に変更しても良いかと思う。特に体育科は単位認定の科目とリンクして「スキューバダイビングの資格取得」など兼ね備えた行先に変更しても良いかと思う。(2学年)
・自習室の時間設定など管理面で学年団の先生に負担がかかり改善策を考えなければならないです。(3学年)

2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る			評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 基本的生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (2) 道徳性育成の取組を促進し、多様性を受容し、思いやりに満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (3) 各校のいじめ防止基本方針に基づき、誰もが安全・安心して過ごすことができる学校の環境づくりに努める (4) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成を図る (5) 不登校にならないようにするための学校づくりを進めるとともに、不登校児童生徒の学習環境の確保や家庭への支援に努める			3.1	2.5
取組	成果	課題と改善策		
・いじめ組織対応の推進。(生徒指導部) ・3学年就職希望者に対する面接・作文・礼儀指導及び各オリエンテーションなどの実施。(進路指導部) ・1・2学年の生徒に対するオリエンテーション・ガイダンスなどの実施。(進路指導部) ・毎月の図書館だより発行、定例の図書委員会の実施、学年アンケートや職員へのリクエスト本の募集。(図書部) ・大学(体育系大学も含め)への進路保障に関する働きかけ。(体育科) ・土台である「安全」「安心」できる学校生活の環境づくりに取り組むため、学校の規則を遵守することを目指す。(1学年) ・時間厳守・予鈴着席・整理整頓・清掃活動・挨拶励行に取り組み、基本的生活態度の確立を目指す。(1学年) ・友人とのコミュニケーションを密にし、人とのかわりを大切にし、調和の取れた生徒の育成を目指す。(1学年) ・人権学習をより深く理解するために、朝の学習とHR活動を充実させる。(2学年) ・ボランティア活動などを実施し、社会における自己の役割を知り、生き方を考えさせる。また、最上級生としての自覚を持ち、下級生への規範を示すことのできる率先した行動をとるよう促す。(3学年) ・あらゆる学校教育活動や人権学習を通じて、人権意識を培う。目標に向かって努力する仲間に対して、日常の中で意識行動し、思いやる心を育めるよう促す。(3学年)	・学年と協力して、いじめ事案の加害者にも被害者にも対応ができた。市教委いじめ防止生徒指導担当やスクールロイヤーとも連携することができた。(生徒指導部) ・就職希望者については望ましい職業観・勤労観を育成しつつ、就職先を決定することができた。(進路指導部) ・生徒一人一人が希望する進路の実現を目指し積極的に努力することを通して、学力だけでなく人間性の面でも大きく成長することを目指し、入試の情報収集を行い、学年と連携を密にしながら進路指導を行った。(進路指導部) ・毎月の「NEW LIBRARY」発行により、生徒への周知はある程度はかかっている。一定数のリクエストを受けて、推薦図書を導入し、図書室内にコーナーを設けている。図書委員会は日々のカウンター当番や図書館報の発行、読書週間の案内などで積極的に活動を行っている。(図書部) ・本年度はびわこ成蹊スポーツ大学へ伺い、指定校や高大接続についての話を行うことが出来た。各クラブに於いても、大学の教員と積極的に交流を行ってもらうことが出来た。(体育科) ・学年の先生方が中心になって、土台である「安全」「安心」できる学校生活の環境づくりに取り組めた。(1学年) ・基本的生活態度の確立をめざし取り組んだ結果、概ね良好であった。(1学年) ・SNS等のツールで友人とのコミュニケーションが多く、人との関わりは少ないように思う。(1学年) ・前期人権学習では、多文化共生について修学旅行先のマレーシアについて、およびマレーシアと日本の関わりについて調べ学習や発表を行った。生徒の関心や意欲も高かった。(2学年) ・ボランティア活動は、生徒会執行部を中心に積極的に取り組むことができた。クラブ活動への入部率は高く、最上級生としての自覚を持ち、後輩への技術、生活指導など下級生への模範となる行動がとれたように思います。人間関係をつくることにより自己の役割、在り方を考えることができました。(3学年) ・自己の進路を決定していく上で、自己の努力はもちろんのこと周囲に対しても思いやる心を持って行動できていました。6月の人権学習の講演では、様々な角度からものを学ぶことの大切を再認識し仲間の後押し、共感など、クラス、友人の和が強くなったのを感じました。(3学年)	・いじめ事案の対応において、加害者への特別指導申し渡しなど、マニュアルを見直し、組織としての対応を丁寧に進める必要がある。早朝や休日などの時間外での対応に苦慮した。限界を感じる事が多く、対応策の検討が必要である。(生徒指導部) ・基礎的な学力向上はもとより、社会に出てから必要な能力の育成がより一層必要とされる。(進路指導部) ・進路指導部と学年、他の教員との連携が大切と思われる。(進路指導部) ・毎月の図書館だよりの発行・リクエスト本の募集・図書委員会の実施・図書館報の作成など図書委員会の活動は充実している。今後とも活動内容をさらに充実させていきたい。(図書部) ・大学訪問にかかる旅費の確保が必要です。昨年まで確保されていたが、無くなってしまった。再獲得をお願いしたい。(体育科) ・専門部の先生方や外部の機関とも共有して、積極的に、環境づくりに取り組む。(1学年) ・概ね良好であったが、細部まで行き届いていないとがあり、今後集団生活の中での行動を細部まで改善に取り組む。(1学年) ・学校行事での学年の活動やクラス活動でのグループ学習などを積極的に参加させ、人とのかわりの機会を多く持たせる。(1学年) ・高校2年生としては精神的に幼く、他者の立場に立つて考えられない生徒やグループが存在している現状である。社会や世界で起きる問題を取り上げること大切であるが、自分自身が関わる小さなコミュニティでの人権問題(いじめについて等)に意識を向けさせることにも課題として取り組む必要がある。自分たちの言動が他者の人権を脅かすものになっていないか、人権学習の場だけでなく、日常生活の中で教え諭し、振り返らせる時間を作る。生徒たちはメールでのコミュニケーションが中心になり、直接、コミュニケーションをとることが苦手となっている。争いごとを好まないが逆に心の奥底に差別的意識が潜んでいるように感じられる。(2学年) ・教員自身が現状に満足することなく、時代の変化に対応できるよう準備することの大切さを実感しました。生徒の生き方を考えさせるための情報収集や情報活用能力を育成するために教員自身が修養する時間を確保することが難しいのが課題です。(3学年) ・日々成長している生徒たちと向き合うことの大切さを実感しました。生徒と向き合う時間を確保することと同時に教員自身が修養する時間も確保することが課題となります。(3学年)		

3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む			評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 教職員の資質向上の取組を促進し、業務改善を進めながら学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 学校と地域との連携・協働を推進し、地域とともにある学校づくりに努める			3.1	3.0
取組	成果	課題と改善策		
・学校要覧、学校案内パンフレット、ポスターなど、内容が伝わるものを工夫して作成する。(総務部) ・全職員が生徒の変化を敏感に察知でき、組織的に対応できるよう教職員対象のカウンセリング研修会を実施する。また、カウンセリング委員会を定期的に開催し、気になる生徒の早期発見に努めるとともに、必要に応じてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにつなげるとともに、ケース会議を積極的に実施する。(保健部) ・尼崎図書館、兵庫県図書館の電子図書の案内、ID登録など。(図書部) ・図書館の利用機会の増加に向けた取り組み。(図書部) ・近隣の幼稚園児を招き、スポーツや運動の指導を生徒が企画し実践する。(体育科) ・体育科としての地域との交流や社会貢献。(体育科)	・学校要覧・学校案内・パンフレット・ポスター等について、中学校関係者から高評価をいただいた。(総務部) ・教職員がSCIによる研修を受けることで、愛着障害についての理解を深め、対応できる力を身に付けることができた。月1回のカウンセリング委員会では、SSWIに参加してもらい、初期段階から助言をもらうことにより、早期対応につながった。必要に応じてケース会議を開き、対応について共通理解を図ることができた。(保健部) ・外部機関との連携を図り、利用可能な状態にしたが、利用者人数の把握が出来なかった。(図書部) ・図書委員会の活動を十分に行ってきたが、利用状況にはなかなか反映することができなかった。(図書部) ・2年生のスポーツ総合演習の中に、近隣の園児への指導を取り入れ、幼稚園児に来校してもらい指導を行った。(体育科) ・各クラブ単位ではあるが、地域でのイベントに参加したり、地域の清掃活動などへの参加を行うことが出来た。(体育科)	・私立高校がPR映像やPR動画を作成し、ホームページやInstagram等を利用して生徒募集をしている現状を踏まえて、本校も検討が必要。(総務部) ・教職員対象のカウンセリング研修会の参加率が、昨年と比べ少し上昇はしたものの6割を切っていた。開催時期や内容については検討が必要である。(保健部) ・今後は、外部機関との連携を図り、利用しやすい関係を築けるように工夫する。また、利用状況の把握が必要と思われる。(図書部) ・ある程度の周知や、書籍の充実は行えているので、課題としては如何に図書室に足を運ばせて、利用する機会を増やせるかが継続的な課題である。(図書部) ・園への出張指導なども話に出たが、生徒を園に派遣する場合、他の授業との時間調整や、移動手段など、様々な課題がある。また、雨天時は園児の来校が無くなるなど(徒歩で来校のため)、その場合の対策なども工夫が必要となる。(体育科) ・体育科として参加するには、時間的な制約や、各クラブでの試合の日程が違っているために難しい。(体育科)		

4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る			評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る			3.1	3.0
取組	成果	課題と改善策		
・防災・非常時だけでなく、日常の指導においても全職員が生徒の安全を最優先とする意識を持って行動できるよう工夫する。(総務部) ・登下校における安全指導。(生徒指導部) ・1年生対象に救命講習(消防署が指導)を実施する。(保健部)	・クラスルームで避難経路を生徒・職員に周知徹底し、年2回の防災訓練を通じて生徒・職員の敏速な避難体制が構築された。(総務部) ・生徒指導部でローテーションを組み、実施することができた。地域の方とも協力することで、一定の成果があったと感じている。(生徒指導部) ・尼崎市北消防署の方から直接、心肺蘇生法やAEDの使用法について指導してもらうことで、生徒の安全に関する意識が高まり、実践的な応急手当を身に付けることができた。(保健部)	・避難訓練を予告なしで実施する。また、地震と津波を想定した総合避難訓練の実施を計画する。(総務部) ・下校時の不審者に生徒指導部で対応するも、勤務時間外のことが多く、対応する職員など、不審者対応については課題が残る。生徒の安全はもちろん、職員の安全確保が必要であり、良い改善策が見当たらない。(生徒指導部) ・教職員対象の救命講習を実施できなかったのが、次年度への課題である。(保健部)		

5 教育目標			評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
			3.1	3.0
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実				
取組	成果	課題と改善策		
・職員室の配置やいすなどの環境をよりよく整備する。(総務部) ・新教育課程における成果の検証と見直し。(教務部) ・生徒会活動の活性化。(生徒指導部) ・ゴミの分別について徹底する。(保健部) ・3年間を通しての継続的な集団行動への取り組み。(体育科) ・体育科として積極的な中学校への訪問、広報活動。クラブ間での意見交換会。(体育科)	・講師席が手狭で兼用で使用していたが、机を増やすことで、兼用で使用することは解消した。老朽化していた椅子を1/3入替えることができた。(総務部) ・2022年度から順次実施されている高等学校新教育課程では、「主体的・対話的で深い学び」の実現や「総合的な探究の時間」の充実など、現代社会に適応した学習の強化が図られている。導入から一定の期間が経過した今、成果の検証と今後の見直しが重要となった。文学国語から学校設定科目「現代文探究」へ移行させるなど、生徒の進路実現を目指すため学校設定科目の充実を図り、逆に unnecessaryな学校設定科目を整理するなど生徒のニーズに併せた設定を行った。(教務部) ・生徒会役員、staff主体の市高祭の企画・運営。生徒会新聞の発行、学校ホームページでの情報発信。週3回の朝のあいさつ運動。全国市立高校生生徒会サミットにオンライン参加し、全国の高校生生徒会と交流(12/14)。これらの取り組みから、生徒会による自治精神が高まりつつある。(生徒指導部) ・4月、全教職員にゴミの分別についての指導を依頼する案内を配布したことにより、ゴミの分別に関する教職員の意識を変えることができた。6月に整備委員会を開き、整備委員を通して市高祭におけるゴミの分別について周知した。市高祭当日は、校務員の協力を得ながら、終了後のゴミの分別チェックを教員と整備委員で行ったことにより、スムーズにゴミの回収が行われた。月曜日の朝にクラブ活動で出たゴミが分別されていないことも多々あったが、顧問の先生に指導をお願いするなどして、かなり改善されてきている。(保健部) ・周囲の仲間を気遣ったり、協力して活動することが出来た。(体育科) ・一学期の期間中に、県内の中学校に各教員が体育科の説明に回った。また各クラブで中学生への指導を行うなど、広報に務めた。(体育科)	・残りの椅子を早急に入替える。また、講師席のレイアウトを工夫し、職員室の環境をよりよく整備を進める。(総務部) ・成績管理のデジタル化を進め、さらに成績処理の効率化(デジタル成績管理システムの導入・運用)を図り、教員業務負担の軽減を目指す。(教務部) ・生徒会役員と、その他の生徒との意識に温度差がある。一人ひとりが生徒会員であることの自覚を促すため、令和7年度は生徒総会を開催する。また、必要に応じて正副委員長会を開くなど、全生徒の主体性を育む手立てを講じていく。(生徒指導部) ・昨年よりはゴミの分別に関する意識を変えることが出来たものの、まだ周知徹底が出来ていないので、今後定期的に案内を配布するとともに、わかりやすい案内やピクトグラムを作成・掲示するなどして、しっかりゴミの分別が行われるように啓発していく必要がある。週末に本校で行われる大会などで外部の教員や生徒たちにもゴミの分別を徹底してもらえるように、顧問会議や部長会議でも定期的に指導をお願いしたい。(保健部) ・教員が指導して行う部分がまだ多く見られるため、生徒達が自身の発想で様々な活動に取り組めるような場面をつくっていく事が必要である。また、集団行動の日常生活への応用をもっと出来るように指導が必要と思われる。(体育科) ・中学生への声かけと取られるような行為の定義が難しく、一般的な話をただで、中学からのクレームを心配しなくてはいけない。今後クラブ化が進むにつれ、広報活動も考えて行わなくてはならない。(体育科)		

6 研究テーマ			評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
			3.1	2.0
常に生徒の安心・安全を第一に考えた学校づくり 開かれた学校づくり 伝統を大切にするとともに、新しい市尼を創造する学校づくり (1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実				
取組	成果	課題と改善策		
・総合的な探究の時間の教材の選定と内容の吟味、また国際総合類型における特色ある教育活動の計画。(教務部) ・大阪府立桜宮高等学校等の交流。(クラブの交流戦や卒論発表会の共同実施など)(体育科)	・本校では、「総合的な探究の時間」を通じて、生徒が主体的に学び、課題解決能力を養うことを目的としている。そのため、教材の選定にあたり、探究活動のプロセスを体系的に学べる教材であり、その内容が多角的な視点から社会課題にアプローチできる内容、またICTを活用し、情報収集・分析・発表が容易に行えるものを観点に特色づくり委員会を中心にリクルート社のスタディーサブリを採択した。3学年ともスタディーサブリを登録していることもあり、保護者負担も抑えることができるのもメリットである。国際総合類型ではGlobal Studies ProgramやPath Finder Programの短期集中講座の実施など行い、英語および異文化理解教育の充実や国際課題に関する探究学習の推進を進めた。また、理系クラスにおいても高大連携プログラムとして同志社大学のキャンパスツアーを実施、理工学部研究室の見学などを通して、探究活動の充実を図った。(教務部) ・今年は本校に桜宮高校の生徒を迎え、卒業論文発表会を行った。各クラブ間の交流も行うことが出来た。(体育科)	・生徒が主体的に課題を設定し、調査・発表を行う機会を増やす。また地域・企業・大学との連携を強化し、実社会とつながる探究活動の推進を目指す。(教務部) ・クラブでの交流は、お互いに無いクラブが有り、交流活動を行えない現状がある。また、陸上や水泳などは、対抗戦の得点化が困難で、お互いの高校で顧問の負担が大きい。更に日程的にも合わない場合が有り、今後継続して行っていくならば、平日に交流日を設定するなどの対策が必要である。(体育科)		

学校関係者評価

※ 評価Ⅲの基準

4:よく取り組んでおり、成果が大きい
2:取り組んでいるが成果が十分でない

3:熱心に取り組んでおり、今後が期待できる
1:取組が不十分である

学 校 関 係 者 意 見 等	評価Ⅲ
1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む ・BYODによって積極的にICT活用環境整備に取り組んでいる。次年度からはiPadに変更することで更なるICT利活用の推進や探究活動、個別最適化に向けた教育に期待できる。デジタル採点システム等の活用により教育DXにも取り組もうとしている。海外との交流で積極的に人権教育、多文化共生に取り組んでいる。 ・ICTを利用した学習支援の確立等、全学年の生徒が自分の端末を持って学校生活を送るようになって、様々な内容で展開を図れるようになった。大体大の先生による専門的な講義を受けることで生徒に良い刺激となった。毎日の朝学習により、基礎学力の定着と向上をはかることができた。事前学習で得た知識をベースに、マレーシアで実際に体験し見聞を広めることができ、マラヤ大学との学校交流や現地学生ガイドとの市街研修にて生徒は英語でコミュニケーション能力の向上を図れた。自習室を開設して、自ら学ぶ時間を待つように図った。 ・教育、学習内容の充実について、努力がうかがえる。やる気のある生徒、ない生徒への対応策を考え、学校側の対策が必要とされる(教員のモチベーション含め)。	3.5
2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る ・いじめ事案に対して市教委いじめ防止生徒指導担当やスクールロイヤーと連携して対応ができている。人権教育については、SNSを通じての問題が後を絶たないが、今後デジタル社会で善き市民として生活していくためにデジタル・シティズンシップ教育への取組も期待する。 ・いじめ事案の取組として加害者にも被害者にも対する対応を図った。市教委いじめ防止生徒指導担当やスクールロイヤーとも連携をはかっている。毎月の図書館だよりの発行、定例の図書委員会を実施し、活動を行っている。ボランティア活動は、生徒会執行部を中心に積極的に取り組んでいる。 ・子供たちにとって学校が安全安心な場所であるよう努める努力が不足している。キャリア教育や社会自立に向けたサポートも要努力。不登校生徒へのフォローや早期に見極めることができていない。体制づくり必要。	2.5
3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む ・幼稚園をはじめ、他校園種との交流を進められている点が素晴らしい。特に幼稚園のホームページを見ると、幼も高も生き生きとして活動している姿が感じられる。昨年と比較して、学校ホームページを通しての情報発信が若干減っているように感じた。SSWを活用して、ケース会議を開き、積極的に生徒に寄り添うよう努めている。 ・学校閲覧、学校案内パンフレット、ポスターなど、内容が伝わるものを工夫して作成している。教職員対象のカウンセリング研修会を実施し、気になる生徒の早期発見に努めるとともに、必要に応じてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにつなげるとともに、ケース会議を開き、対応について共通理解を図っている。近隣の幼稚園児を招き、スポーツや運動の指導を生徒が企画実践している。地域でのイベントに参加したり、地域の清掃活動などの参加を行った。 ・学校や生徒から地域に向けての発信をもう少ししてはどうか？地域のサポートや情報を受け市民全体としてレベルアップするよう努力必要。	2.5
4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る ・地域と連携を取りながら、積極的に登校時の安全指導などに取り組み、自転車通学での安全に寄与することができた。防災訓練では、予告無しの総合避難訓練実施を行い、生徒の防災面の意識の高揚を図っている。 ・クラスルームで避難経路を生徒・職員に周知徹底し、年2回の防災訓練を通じて敏速な避難体制が構築が図られた。登下校時の安全指導も生徒指導部、地域の協力で一定の成果があった。消防署指導の心肺蘇生法やAEDの使用方法を実施することで、生徒の安全に関する意識が高まり、実践的な応急手当を身につけることができた。	3
■教育目標 文武両道 ・積極的に「主体的・対話的で深い学び」の実現や「総合的な探究の時間」の充実を図っている。学校設定科目「現代文探究」へ移行など、生徒の進路実現を目指すため学校設定科目の充実を図っている。1年生の尼崎に対する研究発表会を見せてもらったが、どのクラスの発表も高校生らしい視点でプレゼンテーションができていた。発表時間が5分は少し短いので次年度からは工夫して、10分程度の延長を考えてもらいたい。 ・職員室の配置やいすなどの環境をよりよく整備した。新教育課程では、「主体的・対話的で深い学び」の実現や「総合的な探究の時間」の充実など、現代社会に適応した学習の強化が図られている。導入から一定の期間が経過した今、成果の検証と今後の見直しが重要となった。生徒のニーズに併せた設定を図った。 ・教員同士の情報共有、意思疎通が乏しく感じられる。そのため、子供たちの充実した教育活動に影響が出てはいけないうので、職員室で”報連相”をしっかりとしてほしい。	3
■研究テーマ 常に生徒の安心・安全を第一に考えた学校づくり ・心肺蘇生法やAEDの使用法について指導を消防署員から直接受け、生徒の安全に関する意識が高め、実践的な応急手当を身に付けさせている。 ・総合的な探究の時間の教材の選定と内容の吟味、国際総合類型における特色ある教育活動の推進を図った。理系クラスにおいて高大連携プログラムとして同志社大学のキャンパスツアーを実施、理工学部研究室の見学などを通して、探究活動の充実を図った。大阪府立桜宮高等学校の交流。本校に桜宮高校の生徒を迎え、卒業論文発表会を行った。クラブ間の交流も行った。	3
■研究テーマ 開かれた学校づくり ・積極的に地域・企業・大学との連携を強化しつつ実社会とつながる探究活動の推進を目指している。今後、それらの活動を学校ホームページ等を通して情報発信してほしい。	3

■研究テーマ 伝統を大切にするとともに、新しい市尼を創造する学校づくり ・国際総合類型でGlobal Studies ProgramやPath Finder Programの短期集中講座を実施し、英語および異文化理解教育の充実や国際課題に関する探究学習の推進を進めている。理系クラスにおいても高大連携プログラムとして同志社大学のキャンパスツアーを実施，理工学部研究室の見学などを行い、探究活動の充実を図っている。体育科においても、桜宮高校との交流を通じて、文武両道を図っている。 ・「総合的な探究」については本当に難しいと思うが、子供たちのキャリア教育のために教員が内容を吟味し、しっかり計画を立てていってほしい。	2.5
評価項目（A:優れている B:適切である C:おおむね適切である D:要改善）	評価Ⅳ
アンケート等、自己評価の根拠となる資料は適切か	B
自己評価の結果の内容は適切か	B
自己評価の結果を踏まえた今後の改善策は適切か	B